吟道月報
NO.33
50.4.5
碩心会

吟道ばなし(四)

私はこうして吟の道に入った

会長　三井　雲笙

小学校の時から漢学塾に通はされていたせいか、二十才前後から漢詩に興味があり、時折読んだ本の中から心打たれる詩があるとノートにメモしていた。それがいつの間にか、つもりつもって小型のノート一冊になっていたが、七十年来と言はれる土浦の大水害の時に家財と共に流失してしまい、今思うと残念である。

数種の詩を暗記して山に登った時、我流唸き覚えでどなっていたのを思い出す。その頃は詩吟の先生があるなどとは全く知らず。中学二年の頃歴史の東洋史の先生が来到って時間中によく詩を吟じていたのが頭にあったからだろう。木村岳風先生が全国詩吟行脚に心魂を打ち込んで居られたのは、この頃であろう。

以来三十年間、殆ど漢詩とは無縁であった。戦後の慌しい生活の中で、海軍の先輩、安川天山、高橋碩風氏が亘子で詩吟の会を作るから入らないかと誘はれたが、生活の上からも気持の上からもゆとりなく、つい一年が過ぎてしまった。

或る日高橋氏が職場の屋外で詩吟練習をしているのを聞き、三十年前の詩情をそゝられ、何か心により所を求めていた時だったので、やって見ようとの決心がついた。これも幸に稽場が自宅のすぐ近くであったからだろう。

後年今の戸塚支部長の鈴木萃風さんが、はるばる拙宅を訪れ入門を願はれ、永く遠い道を通って精進された熱意には今思うと頭が下る。

昭和三十四年一月の寒中練習場に出かけ四五人の先輩の方々のお仲間入りをして、拙井、

根岸両先生の指導を仰ぐことになった。入門の日は早目に出かけまだ練習の吟声は聞えていなかったので、すぐ戸を開け中に入ったがあの荘重な吟声が聞えていたら中に入れず止むまで待つか引返えしていたかもしれない。後年或る頑心会の会員のS氏が詩吟が好きでレコードで練習していたが、敵場があると聞き、よろこび勇んで来たが、この吟声に気おくれしてか、三度来て、三度共引き返えし、四度目にやっと戸を開けて入ったと話しておられたが、むべなるかなと思う詩吟をはじめたい人があったら、すゝめた人が連れだって来るか、練習前に来ることである。女性にあっては、特に然りである。

吟をはじめて二、三年して道で千葉（剣風）さんに遭い詩吟をすゝめて見たが、シベリヤ抑留が永く戦後の生活の立ち上りがおくれてそれどころではない様で、三四年して竹村さんにすすめられて入られた時々あの時入って居ればなあとよく話に出る

詩が好き、詩吟が好き、聞くのが好きと言うくは多い、そうゆう人は如何にして入るかが問題で、入れば続くものである。

よく音痴だからとあきらめている人が居る私自身音痴で、今だに一般の歌は駄目である詩吟は基準音に始まり、基準音に終る、その間心ず四五回基準音にかえるから基準音さえとれれば誰でも歌える、詩舞をやって居られる或る女性会員で、音痴だからと入門が三四年おくれたが、どうしてどうして、音感もよく声も出てくるし、日に日に上達して全くくせがない。音痴は心配なく時間的な問題と練習度だけが問題になるだけである。同好の士の一人でも多からんことを祈るや切なるものがある。

以上

顧八会本部関係

会員異動

○退会々員

銀詠支部　278　古田鳥利久治

○新会員

銀詠支部	田中　正二	逗子市逗子五―一―二十一	電（71）三〇七七
松和支部	加藤三千雄	茅ヶ崎市東海岸北二丁目一―五二	電（82）二六〇二
〃	加藤　要子	同　右	〃
〃	加藤　信吾	同　右	〃
〃	関野　シヅ	茅ヶ崎市東海岸三丁目八―七	電（82）二八一七
〃	城戸　歌子	〃　幸町二十一―八	電（82）二二五一
〃	菊地　一三	〃　中海岸四丁目八―一五	電（83）〇二〇九
逗子支部B	重松　由紀	逗子市久木一―七―十	
堀内支部	角田　マツ	葉山町堀内五四六	
〃	相田　信義	横須賀市秋谷五六九六	

○所属変更

234	石塚すま子	逗子支部Aより	桜山支部へ
263	熊田　道泉	葉警支部より	大船支部Bへ

○役員変更

堀内支部　支部長に秋元梁山さん
副支部長に杉山雪山さん

が選出されました。